杉の世

十三

哥と詞を名とせり

[V. 18]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 18
copy 1
Asian
Japan
Case

THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

源世文のるまき　二条院ノ東之

ひんがしの院にくりたてし、蔵ちう里とまうえし
しにうたし給。よしの屋（えい）にはどれなどかけて、ま
どころけいしなどあるべきさ由ましをうを給。東（ひんがし）乃
屋（えい）はあるしのれうにとおぼしをきてたり。さる乃
毎いにとまひろくにくらをまてかりまても衣と
おぼして、に東かけてちさりたれめ給し人ぐ、に
どひまもむべきさ由まへぐてくしにうちをまへ
なしもなつしうれどころありてこまりなり。志
源ノれやまこぶまと之
んでんもふるげ給もず。ときぐにたり給れまれ
所ましてさりうになりれまにひどもしなりせ
まへり。ありしまはれ（源ノ）をうそこうえどいまはなる紙

のぼりまひぬべきことをばのまへど。女(明石上ハ)はるをつゞ男乃
ほどをしひしかるに。こよなくやむごとなき御きは乃
人ごゝろ。中こさてかけはなれぬれあるまさ海のつ
れなさ紙ミ川ゝ。もれしひまさりぬべくきくを。
ましてなるまゞりの覚しなりとてかさしいでまじら
はむ。此(明石ノ姫君をつゞ君と云ヘ)つゞ君のれおもてぶきる。数(うず)なるぬ男のほど
こそあらはれぬ。玉さうなはち(源ノ)ひつゝり給つゝでを
まつことまて。人つゝへまはしこなきことゝいかり
あらんとしこゝぶれてもまゝさりとてかうさしろは
(姫君ノ)おひ出かずまへられ海いざらんもいとあはれな
れば。ひらすらまもえうしこそむかず。(明石ノ人名尼君)おやこちも

けることもりとしなげくる。中ところもつきさそぬ。
ひ(地)しもく(昭君ノ)恵のれ御ほぢ。中勢(なかづき)の宮(兼明親王)ときこえけり
がらうじ御ひける所。大ね河のほとりに何りけるを。
そのれのち。ちかぐしうあひ川ぐ人もなくて。
としごろあれまどふ代しいでく。(入道ノ)此時(中勢)よりまいる
もりて。やど(大井ノ)もりのやうにてあるひとをよびとりて
ゑらふ。世中(入名詞)を今もとしもてくゝうすまゐり
しげミそめしかども。すゑの世にしひかけぬこと
いできてなん。さしにこやこのすゑかもとむるを。よい
うまばゆき人なりいともしるく。ね中びにけり
心ちもしげかなりまじき代。ふるき所ゑづきてと

なんせよう。さるべきもれいあけいさん。すりなど
してかたのごと人すゑぬべくいつくろひなされ
なんやといふあづかり此（やどりの詞）としどろらうずる人も
もれし給ひず。おやしきやぶまなりて侍れど。
しもやまぞつくろひてやどり侍るを。此善の比より。
内のお（源）ほ殿の川（棲霞寺ニなぞらへたり）くらを給れ堂（こぶう）ちかくてかのいたり
なんいと人げさもなしうなりまて侍るいかしき
れ（こ）ぶうだにてく。おほくの人なん川くりいとなこ侍
めり。しげかなるれほいなしばそれやうぶひ侍らん。
なまかそれもかれと（源）のこれかげまかたかけてとしふ
ことありて。をのづからをひくまうちのことぐもれ

もてん。まづいそぎて。おほかたのことぞを抱きよと
いふ。男づからうずる所に侍ふ。又もりつる人給
人もなければ。かごかなるなるひとて。さしどろく
ろ人侍つるなり。こさうの田もたけなどいふと乃
いとづらにあれ侍しかば。故民(こえん)ア大猶(ぶのこ)の君(ゆふ)に申(兼明親王二男伴行之)
もりて。さるべき抱などなりてなんらうじ川くり
侍るをなんと。そのあたりのたくも人のことども給
あやうげにもて。ひげがちに川なしにくきかなを。
もれなどうちあるめつ。もちぶきいへだ。さらに(入名詞)
田(さ)などやうのことは。ろうにもつまじ。ただ年ぞ老
やうにもて抱きよ。(券)そんなどは家になんあれど。すべて

世中を捨る身(まそ)までとしばともうくも羽(はね)もゝぬを。
そのことも悔しくしてめんなどいふまも。
(源)大殿のけしひぞうくれば。けづ(やどりん)ゝしくそ。そのうち
まれなどおぼくうけとりてあんいそぎゞけり。
(匂宮)かやうにおもひよりんとも志り(源ノ)給まで。のぼらん
ことを抱うづらもころえずおぼし。うつ(姫君ず)慈のこそ
つゞと抱しのちをのちの世に人のいひつる
(大井ノ殿)へん今ひときい人わろきなどまやとおもほすに。
川りもそくぞ思かくの第をあんさひ出つると
まろしさをけり(源ノ)人はまじらりんとを(明石ノ)るりしげに
のゝ抱すのいふくせふありなりと見えのまふちおし

うゝぬ心のよういかれとおぼしなりぬ。雅光朝臣（これこうれあそん）
れいの思ぶかうこちはいかとなく。いろひかうまつ
な人なれば川（大井へ）かもして。さるべきさ海なりこそ
うしこのよういなどきさせ給かり。おろすもおかし（惟光詞）
うて。海（うみ）づらはかゝひたる所のさ海はなん詩けると
きこゆれば。さやう（涼ん）のすまねはよしなうらぜいはぬ
べしとおぼして。川くらき給ひ（こ）ぞうは。犬かく寺（じ）の南は
あたりて。瀧殿（うさどれ）の心ぢへなど。をとらずおもしろき寺
なり。これ（大井ノ家）は川づらはえもいはぬ松かげは。なほ乃
いたりもなく。ふてたるもんでんのことそぎたる
さ海も。をのづから山里の衣をしきたり。うちの志川

らひなどまでおぼしよう。おろしきへどいうじう
無びてくぶし(吻衣)いうす。のぶれ(吻ノ心)がたくて。いまもと
むかよ。としへいる漏(うう)をもなれなんこと。衣は入道乃
ころぼそくて。ひとりとまらんことをおもふぶれて。
よろづよかるし。すべてなどうく心づくしまなり
もじめそん男よりと。つゆのうらぬさぐひうしや
ましくおぼゆ。おや(入道ん)こちもかうれむくひまて。
のぼ(楽へ)なさいもひは。としごろねてもさめてもねがひ
つるりし。ころざしのかなふといとうれしそれど。
あひ。ふですぐさんいづせさの。こへがううかなし
それがよりひるせはれて。おなじことをのこ。さらば

わか君をはじめまつりては御めのとさうしのふよりかの
こゝちして。母君（尼君）もいちじう哀なり。此（尼君）ごゝはおぼしける
御ゆなどもすゝめず。（入れと尼君と）けちあされつればおぼして　それは
ありてハかけとおもひん。さてあはるうちそこら
人のあさましうあはれになぐさめりそあはれて
わかき領にぞおほしめしをおぼしてまてひとゑん
さうしらつきさ心をとゞめてこそこれおしけあつれど。
又さかりなるこれこそは世をかぎるべくさすとかな
めれとおりたちてゐぬ命をかぎりませてちぎりすぐ
しきつとおはりまもりあはれなんも心ぼそし。
わかき人々ののぶきをしやひきちかづくつむずれしき

物うかる猿がこゑきゝちまの八さ夜をも又いえうしもうへう
どうしとよすか波をききて袖ぬれがちなり。秋（尼ぜん心）
此頃ひあるれバまのあはれさりかきる心ちして。
（京への秋の比ノこと）そのひとあかあか秋風をしるて虫のねも
さりあへぬまよ海のおとをこいしうてねぶるよ。入江
れいのご秋（や）よりあかうわきてされすうせうちそ。
とこるひねおしうびしうこしいとすれど。これ
もこれもいとをのびぐうし。（惟光）つゞきいいとをしく
うつくしげなよりひかりけんむの心ちして袖より
ほかなもちうちうつ見えざりつるを。（入道ノ）こちれてあれちし
めへる心ぞ夜ちなぎゆくしききまぞびく人よふぐん家

ソ六

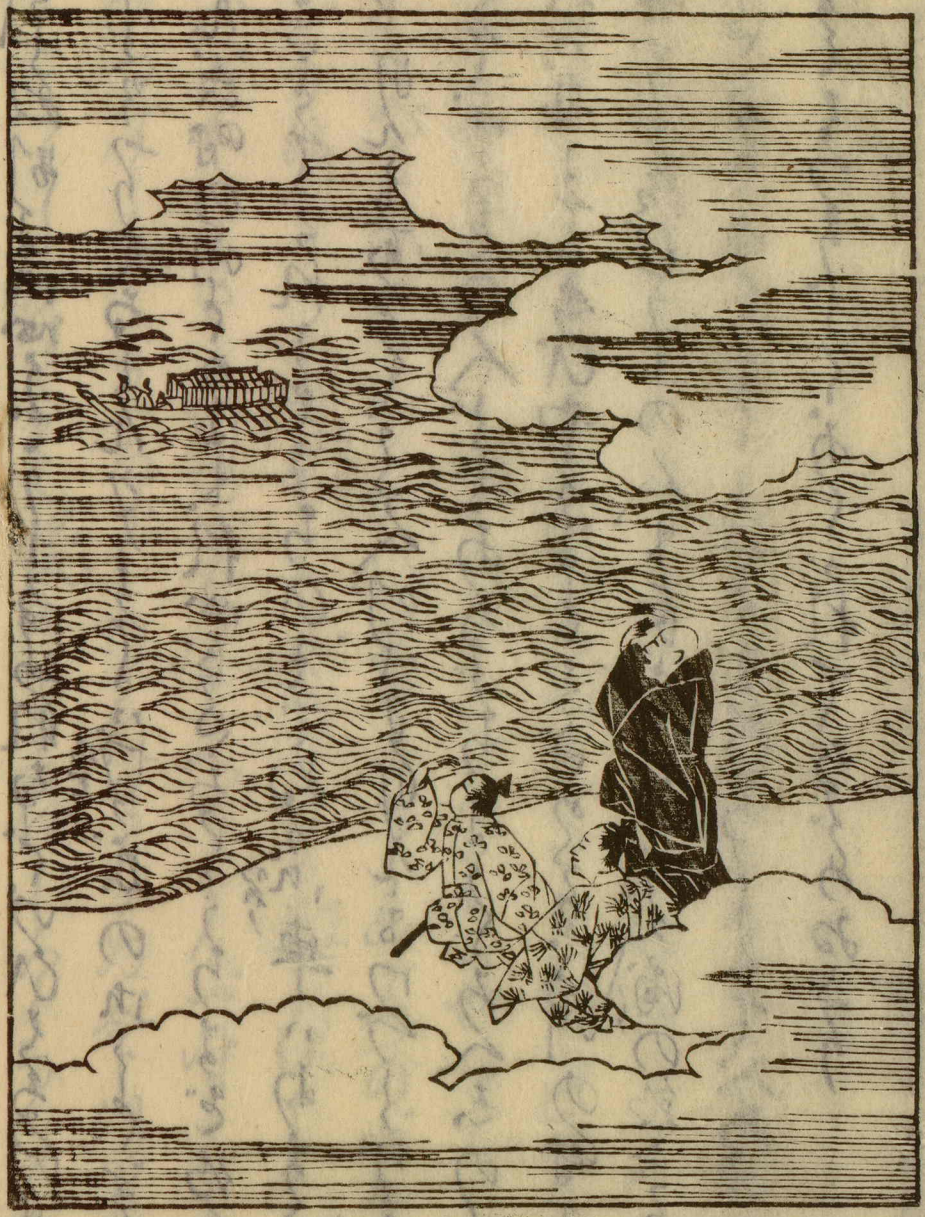
力をいまくしくしちがらかる時こまらでもいか
でかすぐさんとすらんと。のくこあへまで
入石 ひさ記をもかかまいのかけれ絡(ぢ)りゐへ
ぬいおいの泪(なみだ)なりかりいとゝもゆくしやとて。そし
のぐひかくす。おまぎ
尾志 もろともにこやこはいでこさこのるびやひとり
明年此君にまどいんとてなき給さ夜いとことなり
なり。こゝら尾志ん 契(ちぎり)かりしてつもりぬる年月の御どを
しへばかうこまきこゝろことをこのこそとてしせる
くるも。しへばたゝなるしやれ明石
明石 いきて又あひこんことをいのとてかぎりも

あらぬ世をばみん〔入道とさせ給へし〕とりおろさんとおもふまの給
へど、ゆるぐまつけてえさうまじうさふらしをりひつ
川、さすがなるのほどもいとうしろめたきけしき
なり。世中〔入道何〕をすてはじめしなかゝる人のならひく
ざり給ふことしもおぼえず、君〔聟君〕のゆくすゑをやうなおほけ
なれのれうしづきも心よろしからやうもやとおもひ
かへさらしうど、君のつくなりけるはの〔初め〕ひ
あつかうことおほくしければ、さらに教まうへるて、
かいさづか〔受戒〕りのあげめうさびまて、まづしき家乃
よろずむつかしきことのおほくおしわたることもちまひ給
うしおほやけわたらしありなどきこえしまゐらせ

ひろめて、おやの所なきうげをもづかしめんことの
いうじさまなんやがて世をすてゐるかどでなり
かりと人にもしられましをそのるゝりつけてハ
ようせひもなちてがりとせひ給るに、君(明石)のやうく
おとなびなひ抱おもはしきるべきまそへて、など
かうにおしきせかいまて、ましき紙かくしきし四
らんと、うろのやうもれまなくなげきはたり給し
まゝに、仏神(ぢじん)をこれこそしてさりともかうつる
なきまひかれて、山がゐのいはりまてまぎり給
ひしとおもふ心ひとゐをこれこ給しり、せうなも
がこゝろてうれしきことぐもをこなりそめても、中こ

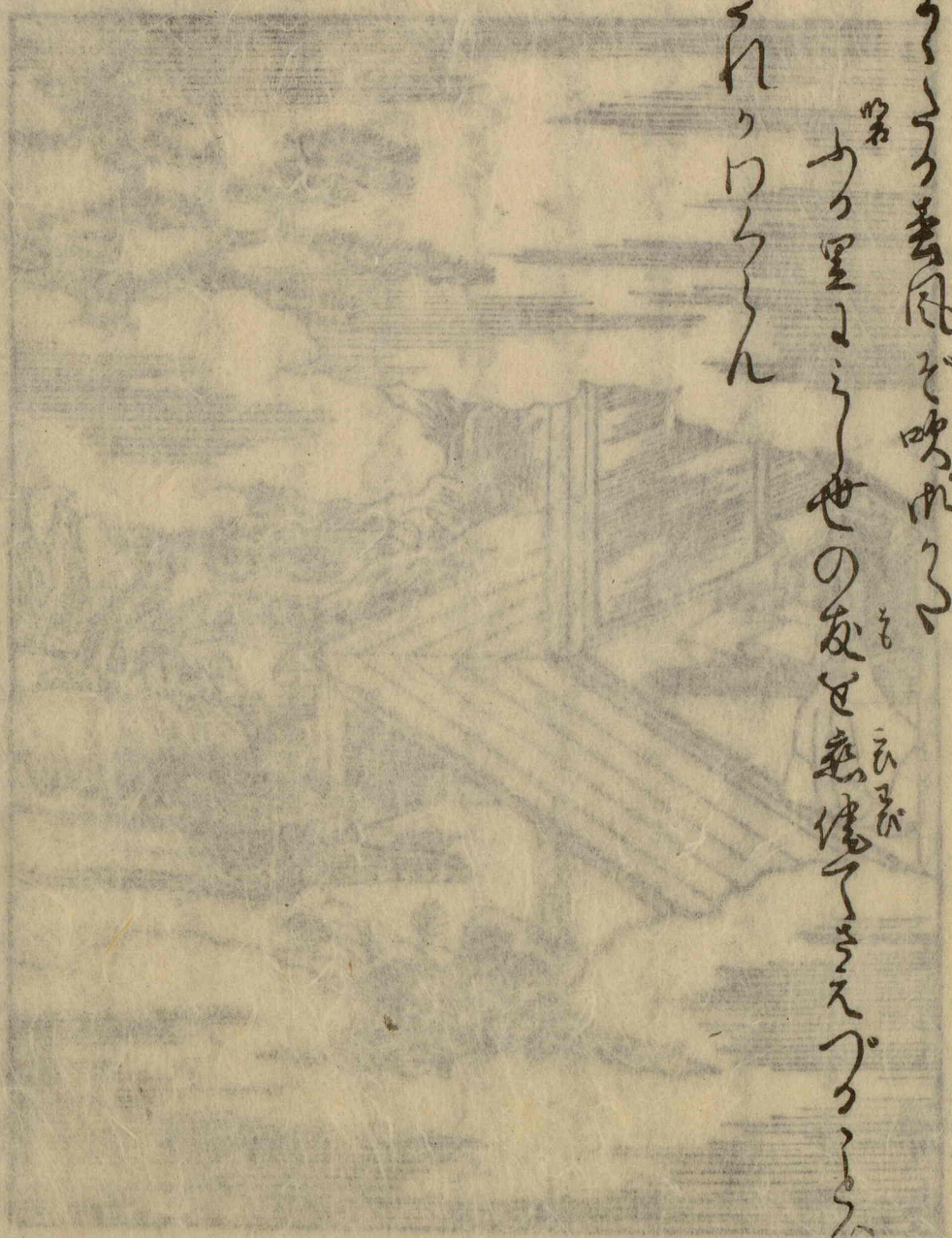
身の間どせ。とき夜かうざ夜にかゝるしうちなげき給
つれど。ワゝ君（姫君）のかういでおりしましうる。此すくを
のこれもしさに。かゝるちなぎさに月日をゐし給ハ
んもいとかうじけなう。契ことに思ひしこまんへバ
こなりしざらん心まどひハしげめがくなれど。此身ハ
なぐく世紙すてし心もべ望き。君ぞちハ世をてら
しまべきひかりしるなれバ。しげしかゝる山がつの心を
こぐり給ぢりの此契（ちぎり）こそハなりけめ。天（てん）にむまるく
人のおやしきこ川のこちにかへるらん。一時ハり
しひなずらへて。今ふなぐワれなりぬ。今下川き
いとしきしめすとも。後（のち）のことに思ひしいとなむな

さこぬ別まれ心ぼこうしろすがれなどかひちり
うこぞつりたまらんろまでハワづらのれくとをきし
ん。六時の行とめまもれ心ぼそくなくうちすぎ侍め
ござとそ。これまぞうちひそこめり。宿れハ東ハわする
つげりんも旅きく。うつくげつまけれ。あワづらりし
とそれとものへごもあちかちよりくろへ志のぶ
れバ。舟まそ急びやりまとさぐめくりぶ河の时ま
舟でし滝むりしの人も家といひけり滝の飯ぶろ
へごるかりゆくまくまいくまれぢなしくそ。六月ハ心
すこまつまじく。おくぐれてあずめおるり



かくいひて今はしまのかげもみえずお
ほぞらみなあをき船
かれこしまことよりましあま船のそむとし
くるまこそ人家のれ也けり
いくかへりゆきかふ秋をすぐしつゝうききあま
のりてわれかへるらんおもへばこの稲まてかへり
けるひぞいりぬめべ人は見とがめれじ乃
心もあればいちの経もかゝるはさふらう家忠
さはもおもしろくてまでろへいける海いくはおぼし
されば家の人々心ちまさず黄のごとく思しれ
て哀なることおほりつゝりそへてらうあらがく故

あるさ夜に水のあがれもおかしうしあるしこり。まだ
こ夜やかるるにはあらぬぐ。すこしけりがさてもあるぬ
べし。志(源)しきけいしにおほをなて。れまうけの
こくをさせ給かり。けこり給いんことも。とううおほ
しこぞかるほどに。日ごろへぬ。中(昭名)もれしけぐけ
られて。そてし家ぬも無しうつれぐなれば。かれ
れ(源)かこのきむ(琴)をかきあらす。おりのいこじう思(志の)び
がこかれば。人ぞなれこうかこにうちとけて。すこし
ひくに。松風をしこるくひぐきあひこり。何まぞ抱
がるしげまてよりふしぬへる。おきあがりぬ
月(尼志)をみてひとりまへれる山里にをてし

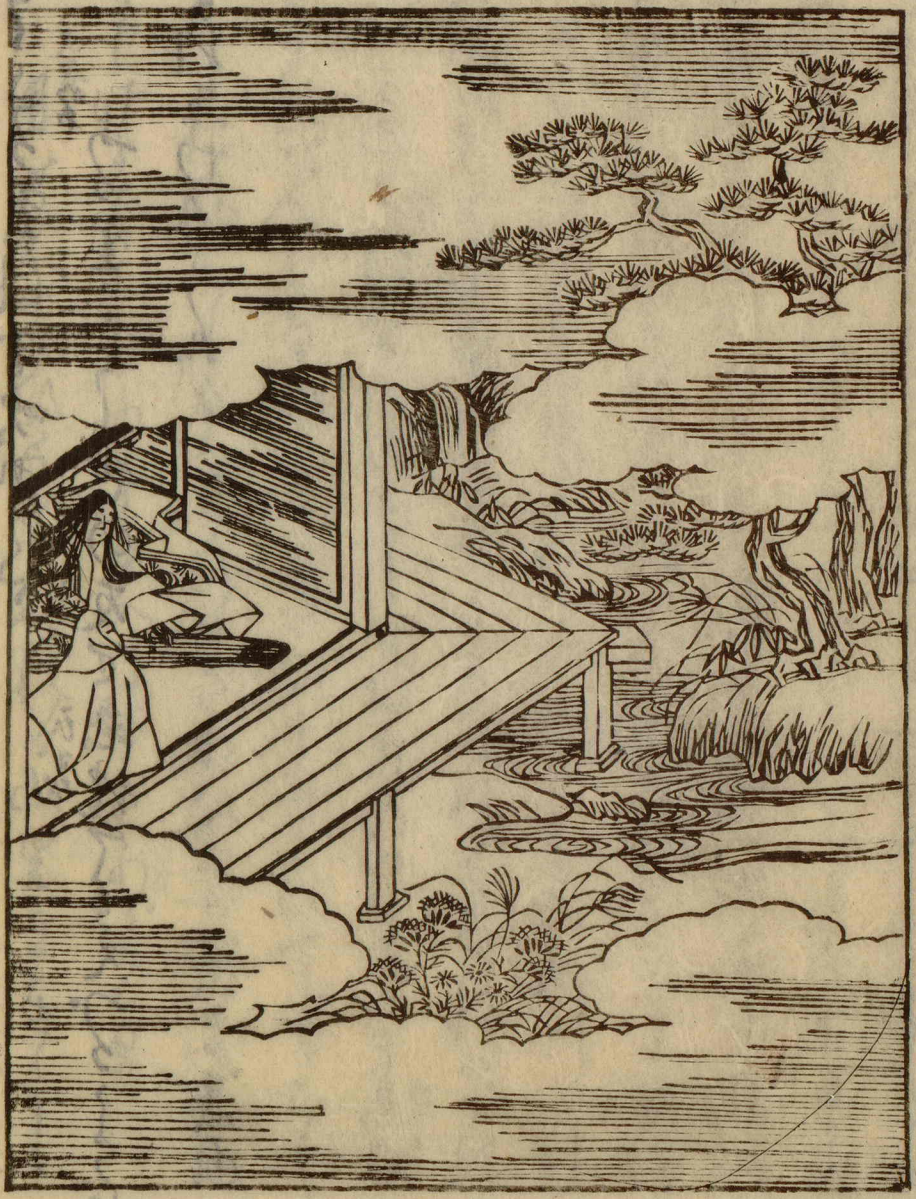


まくらの美風ぞ吹ぬる

[illegible]

かつ里まうし世の友を[illegible]

これがはくらん



いやうまれたれくてあしくしに源に。おとぐ
なかくしげうろなく御ぎるれば人先をもえ
もぐりあへ給もでいたり給を。女ごさみりも
うくなんとうしうましくをなり給いざりけるを。
例のきくもやあもを給とて。せうそこ罪を給。うつく
まうるべきことと待るをいさや心にもあらで御ぞへま
かりとふらいんといひし人さへ皮いたるもちく
きおてまつなれがうろぐるしくてなん。さがのく
こぐうまもかざりなさ佛のれとふしひしくべかれど。
二三日いもべりなんとまうし給。うつくの院といふ
所にはうまいつくを給とまくいそこにすへ給ふ

まやとおぼしてま心づきなければをのゝえさへあらく
め給はんほどや。まちどをまと心ゆかぬれかしさ
なりれいの（源内）ふくべぐるしきれ（雲ノ）ころかれ。つましへのあ
ゆさ風。なぞりなしと世人もいふなるもれをと。
なまやかやとれ（雲ノ）ころとり給ほどに。目ふけぬ。志のび
やうまれ前（ぜん）うとさいまぞでれ心づかひして（源大井一）ゆくり
なぬ。そかれ時におりしつさうり（源）うゆ（明石ん）のれぞに
やつれのへりしぐに。世にしらぬ心ちをしを。まして
さうれ心して。ひきつゝろひこまへるれな紙しす
がゝ。世になくなる風めしうまばゆき心ちすれば。
（明石ん）せひむとびつる心のやゝもちるくやうなり。（源ん）光げゝ

こともりさきを。れ。れはいあるところまうのろひ給
へとのゐへど。いとうねくしきほどすぐしてと
きゝゆるもことゝ（源ん）りなり。我ひとまころげまちぎり
ゐらひあるし給。つくろふべきところぐのあづかり
いまくもへたるけいしなどりおほきらる。うつし
のねんりつたりゐべしとあるを。かれど。ちうさ
ゝさうの人ぐ。ゑりあつまりたりけるも。これたづる
ゑりたり。前栽（せんざい）どものおれふしたるなど。のくろを
給。うゝしとのたていしぞも。これまろびうきたるを。
なきけありて。ゑれさば。おしうりぬべき。ゑかれ。
かう。ゑをつぎとのくろふも。おいなきつぎなるを。

源氏方々とぞて……

さてもすぐしきこえつるにばかり時もれしくこころつきまゝ、
かゝりけるにも、ふかきこゝろのものし給ひぞ、
なまこゝろつゐにうちとけ給へる、はじめてこしおぼえ
のぞきこしをなりける、おぼいもわすれ、物思ひもなく
心ちして、うちゐるぬ、東のつま戸のもとよりいづ
水の心ばへづくしたるを語りて、いとあはれにしき
うちとすぐる、打とけゆへる後、いとめでたう見えし
ところなるに、おかれぐちなどのありさま語るに、おほし
出て、おまへにはこゝろなつかしと思ひけるをこすゞく
ありけりやとて、ねたまうしめ出て、なまう、おぼゆ
まさなりゆて、つれなくして、ありつかへり人の

ゆへ、れをこなひの時ど衰ましそせるしきしゆれ。
いといろくせひすましゆへりしれすこうをすてく。
うき世まうへりゆへる心ざしあさうしず。入道ノ事まこうし
こまはいうまさまりて、せをうを給らんと、さ海ぐま
なんと、いとなつうしうの給。尾志詞まて侍し世を、今さらま
さちうへりせゆへ、こゞろくをとしまうしを給ふれば。
命ながされしるしもせうまへしられぬるとうち
なさて、おし破(笑)げに心ぐるしうせひまうしさせ
侍し。ふる紫の松もいまはこのもしきれおひさきと。
いまひ罪しさするを、おささ孫ざしゆへやいかゞと。
こゝぐ心ぐされ侍るなどさしゆる。けまひよし

あるしの〇は（源）若地がたりに（羽）みこの（中務歌にあるこ）とゝ給けるありさ間
あるじかたしを給ふつくろもれたる水のをとなひ
ぞとがましうさも也
（尼云）すゝなれしへいかゝりてゝどれぞし水ぞ
やどのあるじがかなる。けぢとはなくていひけつさ
間ゝやびかよしとさ（源）給
（源）いさゝねはやくのこともますれしを。もとの
あるじやおもがたりをる。おもれとうちあるがめて
たち給。すぐゝまほひせよしらずとのゝせひ（尼云ノ）四ゝ（栖霞寺）
（さ）るはつたりなて。月ごとの十四又日のごもりとり。
をこなるべき。ふげんかうおこぐさ（れ）念佛（ねんぶつ）のゝ

まい
昧をかさぬれまそみくらへともとちをめくべき
ことさらめをとせ給ふのかぎり佛のれがくおすぐ。四君そ思べ多
めぐし相ほもろ。指のおくさまへり給。おりし
浄土寺より大井へ
夜のことおぼし出ゐてありすぐさずうれしきむ
昭
れことさし出ありそこそうとらく拘哀ありまえ
浄心
見び給ちでうさるし給。まうくへもかくす
ひろへしその切りふまれ心ちしのみ
浄
契しまうそしぬことのあくべまてこえぬ
心の内どあらしさや。女
昭
うつしとちぶりしことのをまて松の
ひぐさをねぬをそへしれ。やゆかましさる

まげるゝぬよそ口。力まあまりたる事様なすめれて
よるうねび（昭名）まさりまけるうちけもひ。えおもほ志
すつまじう。ゆゑ（昭名）ゐぐさ。ぐさ。つきもとずまもられ治。い
うまきましゝ。ぐろへたるさ海まておひいでんが。こゝろ
ぐるしうくちおしき紙。二条院より（昭名）ゆゑして。こゝろ
のゆくかぎりもてなさば。後のおぼしもつゝまぬかれ
なんしとおもほきど。文（昭名）ぶもんこといとおしくて。
えうち出治いで泪ぐゝてゝ治。お（昭名）さなきこゝちり。
すゝしもぢしひたりしが。やうくうちとけて。もれ
いひけしひなどして。むつれ治をこゝろまゝなり。まほひ
まさりてうけくし。ゆゑ（昭名）ぐさておいするさ海。ゑるうひ

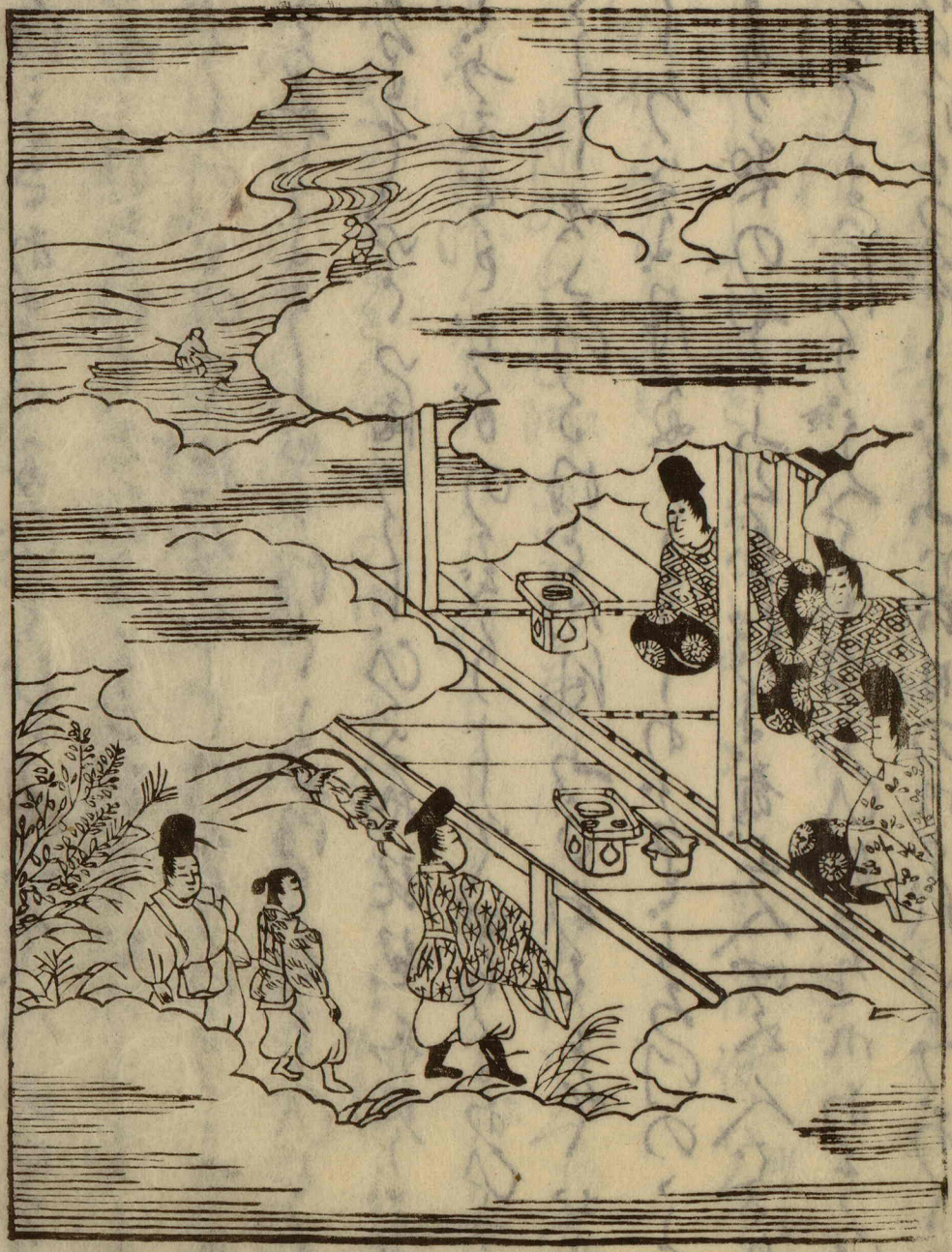
あるて。すくをこまあるしとそしたり。又の日は（添）家人の色
らをのべられば。すくし此度ごもりすぐして。やがて
これより出のべき紙。かつらの院に人ぐ相聞く事り
つどひて。（大井之）こゝにも兼ぶ人あまた事りたり。（添）此さう
ぞくなどしのて。（詞）いともしたるきけざかれ。かくこ
あらはさるべきく後にもあらぬをとて。さもがし
きまひかれて出給。こゝろぐるしかれど。さりげなく
まぎらはして。たちとまりのへる戸ぐちに。めれと
けるぞいざきてさしいでたり。（添）衣なる此気色にうさ
なでのて。（詞）こでいいとくるしかりぬべきこそいとお
つけなれ。いかゞすべき。いと罪とをしやとの給人ぞ

もろうまむ女へうりつかさし代よりも。いまからの御
まてなしの。おぼつかなう侍らんも。こころぶくしま
などこさしも。つゞ君てをさし出て。こちらまへる後
しらひ女へ。つゐ升なて。おやしう。其ゆへ
まこそありけれ。しばしまてもらるしや。いづら
など。もろともまいでゝはおしこゑもぬ。さらばとそ
人心ちもをめとのなへ。うちひて。女君まかく
なんとこさしも。なかく抱しこゞれてふしこれば
とこのしもうぐかれず。おまりぶるめしとおぼし
うり。人ぐもかゝりいゝかれば。しぶくまおぎり
出て。其丁まさゝ。かくれうゝちらめ。いうじう

ゐ風めいてよしあり。こをやぎころけもひ。ゑここち
といたんまもこりぬべし。源こびしひきやりて。こ風
やうまうこひ語とて。とぢりかへり見ゐへるより
岩心さしそ志げめつれ。こをくりきそも。いたんうこゐきさ
さりの源れうこちあり。地いこうそびやぎゐへりしが。
すこしあり。あふ風どまあり語まかり。れすぐこゐど
うこてこそもれくしかりかれと。れさしぬきの
すそまでゐ風めくしう。おいぎやうのこぼれ出るぞ。
あながちあるこゐしあるべき。かれとけこりし
右近衛監くこ人もかへりありまかり。ゆげいのぎうまて。こと
しかうかりえてがり。芳まあくこゐ。心ちよげまて。

ゆきしとりまよりさたり。人かげをうつけて。さし（藤人詞）
うきの抱ひきれし。傳ふ。ひどかしてかれどえこそ。
海風おぼし傳あらけきのねざめまも。おぼろかしき
ろしさすべきよすがぐまなくてと。けしきだらむ
を。やへ（略ノ女ヘウ詞）ろやまは。さらに（大井ノ事）鳴（志ま）がれ（略ノ事）まもをさしぐり
けるを。松も芳のとゑぞられつるに。つすれぬ人も抱
し給けるまぐれもしるどいふ。（藤人詞）そまなしや。我も
おもひなきましもあらざりしをなど。何さまし
う。笑ゆれど。いまことさらにとうちけぎやどそて
ありぬ。（源）いとこそおしくさしあゆる給祥。かしうまし
うをひとらひて。此車のもりに。（とうのちうぎやうひやうぎのかみ）頭中将兵衛督のを

君(源氏)いとかくしもきこえられねどあはれときこしめて
それはこうとかうかうり君(律師普賢などを云)は人の有さまち
おもしうれきもはとられ侍りけるとおのへ(?)れし
ばけさ露(つゆ)をはけてまうり侍る山の御寺(みてら)はまぐし
う侍りけり。はちすの色(いろ)こそさりは侍れおなじの
(墨染を翁と云之)わたらむの。(小宰)こゝろはうつしてそうちをられ侍めり。
いふありめしんなどいふ(源)かゝはみえて侍るまとくてぞ
あるさまはおりしまぬなはるあはれあるしまさ
もたせて。うつゐどもめしよろはおもれさえつりなば
し世の宿世はさとめりめうてこちてとりよろし
りつけるをとしかおぼえぞこそかぜひとまぶてまのれら



ぬほこさあまさゑびどむなどれて川のつらり
あやうげなれど思ひよまざれておりしまし
ろしし川をのく絶句(ぜつく)などいくりつらして月
ちるやうなさし出るほどに、ぬほもあそびたじ
まるとて、いと面めし、ひさ地琵琶、和琴(ロごん)ばる
ぬ、ふえどもどぶのうぎりして、おりるあひたる
てうし吹たるほど、川風ふさあをきて、おも
しろさに、月ゑくさしあがるとよろづのこと
すあるあのやふ事行に、夜ごと人四五人ばかり
つれてまいれり、冷うへまさしひけるを、れあそび
ありけるついでに、かふ六日のれもれいみ、おく日

まて。かるしぎ。まりのべきを。いかなれどとおほ
をられかれば。こゝにかうとまゝをのよけるよし
（詮）まうしめして。れをうそこあるなり。今れ使いそ（詮ともあ）
人の弁なりかるを
（詮東）月のとむ河（クヤ）のとちなるほとなればかつらの
げそのどけるゝんうしやましうとあり。（添）うして
まりまうしさを給。うへのれあそびよりも。れとこそ
うらのすぐさ。ほへそへこゝものゝねをめでゝ。まゝ思ひ
くもゝまぬ。こゝにはまうけのもれもさふらはざり
かれば。大井にいざとなるぬまうけの柏やと。いひ
けかりしこりとりあへこゝにしこゝがひてまつし者

たり。きぬびけふ（二花）たけまてあるを。れつゝひの年をと
くゝりまいれば。女のさうぞくうづけ給
（源）久かたのひかりまちうさ名のうしてあきゆふ
きりもたれぬ山里。（ぎやうがう）刑（ぎやうがう）まち（比）里を給れ心ぢんなる
べし。（源心）中におひたるとうちずんじ給つゝでに。うれ
あもぢ（聲）鴻をおぼし出て（ミ）粥（つね）恒が。ともろうしうも
とおぼめさけんことなどのあひ出たるに。（比）枕衣な
れ思ひなきどもあるべし
（源）めぐりきてまとうづりきやけきやありぢの
鴻のあもとこし月。新中将
（紀年）うき雲にしぢしまぐひし月新のすゝもつる

よぞのどけうるべき。左大弁（右イ）（源こまうどに盗給時ノ人也）すこしおとなびて。故
院（相つぎ所門）の御時にもむつましうけうまつりなれし
人なりかり
雲（左大弁）のうへのとみうをすてゝ春宮の月いづれの
こまゝかげかくしけん。心（地）ぐるしあまたあめれど。うる
さくてなん。けぢうう（源）折しづまりたる御物語すこし
うちこぼれて。千年もこゝろ故御しさ御何りさ故
なれば。をのゝえもくちぬべかれど。かゝさんもとて
いそぎかへり給。物どもしたれぐしかづきて。雪のゝ
えまゝにうちまじるとうも。前我（せんざい）の雲にこしまがひ
たる色あひなど。ことにめでたし。を清（こん恋）づくさの名

ことさとゆり。もれくかしどもなどさふらふなり。
さうぐしなれば。そのこ夜などこぞれあそびて。
ぬぎかけ給(深ノ衣を給ふと)多く。私のよしさを風の吹おほふかとこ
ゆ。のくしりてくんしを給ひぐさ給。おほ(略)けなれは
抽へぐてしさて。なぐりさびしうなぐめ給。れしさう
そこをぐるをでと。おとぐ(深ん)もれ心よりれ。夜り
おいしてとがりうちやすこ給。やま里のれもれ給
なと里れ給。いとまさてし(詞)ほどすぎつれば。いと
くるしうそこのすさもれどものこぐ。さて。いと
いたうしぬとぐりしよひかされて。けさはいとなや
ましとて。おほ夜ごもれり。例(笑ん)の心とけずしぬへど。

こしかたのやみにまよはずひとつのかねをぬらし
がゝるもうきよのならひありけれはわれとちぎりし
の人とさへきこえて縁切れうつゝにもちゝ
契り給ふひさしさぞはめていそがうき給もうしこふ
めりいてなめこ海やうまこのつちさめきそへいかえ
もとをこゝろにすゝしこゝろのぞその鞘うちかけ
さかしひのべにあれどもさけぎりにける氣色とりてり。
我をうけぬれどもまずてあめおりけつれくりもて
まいれりえ門くへし給もて此しんずとにつく
かるべきにもこゝろばかりやまうくしらまん。
むつましやうらもみくちらんもいまの門いさあるき

ツ二十

ほどにまゐりにそりとて。はけうそくにまゐりぬるて。
れ心のうちにいと（雖恋ノ事）義に恋しうおぼしやらるれど。
史をうちながめて。ことに抱もの語ゆず。文にひろ
ごりながらあれど。（柴）如恋に語をぬやうなるを。をめて
こうくし語れまじるとこそ口づくもしかれとて。
（地）うち思ふにまへる。れあつざやう事をさまでこぼれぬべ
し。（源）さしよりなて。（羽）まことにいらうたげなる抱をこしらが。
契おきくもこしぬを。さりとて抱めるさん。ほどもなく
りおほうるに。ちひなんいづらひぬる。おなじ心に
ちひめぐらして。れ心におもひさぶめたまへ。いかに
すべきこゝにてもぐらに語てんや。ひるのこがらは

ひまもなりまけるせつえなきさ雨なるもせひすて
がうこそいたけなげなる志もつくるも（勝ゆひくる）まぎらへ
さむなどはまふをめぎ雨しとはばさずにひきゆひ
まへりしと罵し給（雲司）せたずまのこさりなし給れ心志
へぐそをきめてこしらずうらなくやはとてこそ
いたけなるらんれうろまはいとようなるひぬべく
なんいかまうけらしきほどまとて すうしうち思
こまぬちごをつりなうらうたきまれましまふれ心
なれバそていぐさかしづかぢやとはばしていかる（涼ん）
をまし むかへやをまりしと覚しこぐろ（大井一）つたりまふ
ことはとかうし さがれてこぐろの念仏などまち

いでゝ身よこそびたりのれちざりなあり年の
はたりまはたちまさりぬべかめるを、をよびなさ
ことゝもへどもなをいうゞもれおもしろし思

69038
6 AP78